

---

# 最初で最後のバレンタイン

まなつか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最初で最後のバレンタイン

### 【Nコード】

N8337Q

### 【作者名】

まなつか

### 【あらすじ】

私には中学の頃から好きな人がいる。明らかに周りから変な目で見られている彼でも私の中では常に輝いていた。そんな彼を追う日々、両親から転校するという話が

普通の少女と変わった少年のバレンタイン。

少女の淡い期待と夢は叶うのか？

一年に一回の大イベントを題材とした青春ストーリー

## 第一話「決心」

いつからだっただろう。

たぶん、あの日の事件からだっただと思う……。

朝起きて登校するまでに痴漢に遭ってしまったのだ。

そのときに白衣に身を包んだ明らかに変だとわかるような彼が私を助けてくれた。

名前は水沢浩太。

その日から私は彼を意識し始めた。彼は十二分におかしい人だ。それだけど、私の中で彼は世界の誰よりも輝いて見えたのだ。

現在、彼と同じ高校に通っている。その高校に入るにはかなりの学力が必要だったけど、彼に追いつけるように毎日必死に勉強した。それだけど、未だに彼に告白することができない。話をする。同じクラスだからよく話はするのだ。だけれども告白までは意気地なしの私にはとうていできなかった。

「おはよう、水沢くん」

「ああ、おはよう山倉」

私は最近彼と一緒に登校している。　　というか、私が勝手に横を歩いているだけに過ぎないんだけど。

彼はいつも通りの白衣に身を包み、何かの資料に目を通していた。

「あのさあ……」

彼が資料から目を離さずに話しかけてくる。

「俺と登校してて、いいの？　周りから奇怪な目で見られると思うぞ」

「ん、いいよ。私が好きでついて行って行ってるわけだし」

「ふーん。物好きだな」

彼は普段クールだ。だけど、化学のこととなるとキャラが変わったようにオタクと化す。実際、彼が所属している化学部ではそういうことがしょっちゅうあるらしい。

彼は資料を鞆にしまい、ノートパソコンを取りだした。そしてなにやら熱心に片手で打ち続けている。私のところからでは画面が見えない。

「ねえ、今日は何見てるの？」

「タキオン粒子についての文献」

「へ、へえ」

帰ったら調べてみることにしよう。

そんなことをしているうちに学校に着いた。そしてやはり奇妙な視線を浴びせられつつ（私は全く気にしなくなった）教室に向かった。

彼と私の席は隣だ。この間の席替えで委員長が直々に指名したのだ。変人同士なら都合がいいとか。……何も返す言葉が無かった。

私は準備をして友達のところへ行った。

「ひゅーひゅー、今日も熱いねえ」

「いや、ただ登校してきただけだよ」

「だって毎日じゃん。でも彼も彼よねえ。月美があれだけアプローチしていても気づかないふりしてるし」

彼は私の気持ちに気づいていた。この目の前にいる友人らが直接聞いたのだ。私の知らない間に。

「おっと、そろそろホームルームだ。席付こつ」

私はバイバイと手を振って自席に戻った。

彼は思いきり校則違反の格好で校則違反であるパソコンをいじっている。

彼はいろいろと実績を出しているらしいから先生が黙認しているのだ。

「なあ……」

「何？」

彼が眼鏡を中指であげる動作をしてから私に何かの紙を渡してきた。

「これ、見てくれ」

「ん……と」

内容は高校の化学だった。その問題らしい。

「これがどうしたの？」

「問題ないか？」

私は一通り目を通す。私の頭でも理解できる問題だったから問題ないと答えた。

「そっか。ありがとな」

「これ、何なの？」

私が彼の机にプリントを置く。

「教師に頼まれたんだ。『化学の先生が病気でいないから水沢、お前がテストを作ってくれ』って」

「マジで?!」

「大マジだ」

いくらなんでも生徒にテスト問題を作らせるなんて……。

そして、担任の先生が入ってくる。

「あー、今日は連絡するようなことは無かったと思う。ちょっと待ってくれ……」

この担任はかなりの年だ。完全にぼけている。そろそろ解雇した方がいいんじゃないのか。

隣のクラスに行く。その間、静かにな

これが私の日常だ。

私はハンドボール部のマネージャーをやっている。

しつこいマネージャーに無理矢理勧誘されて入ったのである。

私は嫌々やるものの、冬場はたいした仕事がないので最近では部活

をせずにそのまま家に帰っている。

今日も一人で家に帰ることにした。

「……あれ？」

家の車庫に車が二台ある。両親がそれぞれ一つずつ仕事用で持っているのだ。それが二台もそろっているってことは……。

いやな予感がする。

それでも私は平常を装って玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「おかえり」

お母さんが出てくる。そして、こつちへ来なさいとリビングの方へ手招きをした。……やっぱりそうか。

私がリビングに入ると父親が寝転がりながらテレビを見ていた。

そして私が入ってきたのを見るとテレビを消してソファーに腰をかけた。私も鞆を置いて腰をかける。

「あんな、月美。引っ越しをすることになった」

「……え？」

いきなりの切り出しに私は動揺した。引っ越して？

「東京に行く」

「東京って……ほんとに？」

東京に行くっていうことは転校しなくてはならない。っていうかなんでそんな遠くに……。

「仕事の都合でな……本当にすまない。もし、転校したくないっていうなら、三月までここに残ってもいいぞ」

ここに残るって……

「お母さんは？」

すると私の後ろにいたお母さんが

「私も行くことになってるのよ。私とお父さんは同じ系列の会社だね。あつちに会社を作るから夫婦で行ってくれって」

「そんな……」

私の頭の中に水沢くんの顔が浮かんだ。彼ともお別れになってし

まうのか……。

「……嫌だ。私は行かない」

私はきっぱりとそういった。父親は一瞬渋い顔をしたがはあと息をつく

「……そういうと思っていた。わかった。三月までお前ひとりで生活していけるのか？」

「やってみせる。だから私はここを離れない」

「……わかった。お父さんたちは明日出るようになってる。すまない。これからは二ヶ月ほど離ればなれだ」

その後いろいろ話を聞かされた。電話をするようにだとか変な人には気をつけるとか。

そしてその夜、私は決心した。

最初で最後のバレンタインに彼に思いを伝える、と

## 第一話「決心」（後書き）

こんにちは。お久しぶりです。まなつかです。

最近、テストやらなんやらで忙しいです。しかも、今週もテスト

.....

遊んでいられませんね。

さて、連載中のChristmas〜の方が季節外れなのに連載中でして.....この話はバレンタインまでには完成させたいです。

それではっ!!

この物語はフィクションです。

作品に登場する人物・学校等、実在のものとは一切関係ありません。

## 第二話「同棲」

今朝、お母さんと父親が出て行った。

私は心配する父親に何度も大丈夫と言って、行かせた。

姉の友恵がたまに帰ってきて様子を見てくれるそうだ。姉はもう社会人で彼氏がいるそうだ。たまに帰ってきてはすぐまたどこかへ行ってしまふ。姉は明るい性格でよく私の面倒を見てくれた。

「さて……と」

私はため息を一つついてから朝食の準備に取りかかった。

朝は簡単なものにする。トーストにハムだけだ。足りるかどうかはわからない。毎日お母さんはご飯をちゃんと用意してくれた。まあ、学食でなんとかなるだろう。

私はさっさと食べて準備を済ませると家の鍵をきちんと閉めて家を出た。

「よっ」

「みみみみみ、水沢くんっ!？」

何故かいつものように白衣に身を包んだ彼がそこに立っていた。

一体彼が何故　？

「お前んちも親、転勤か」

「え？」

「俺んところも昨日の夜に出て行った」

なんと……!　まさか、そんな偶然が。

「ったく。こんな中途半端な時期に転勤なんてな」

「あ、うん……そうだね」

私はその後いつものように登校した。彼もいつものようにパソコン片手に歩いていた。車や障害物にはきちんと反応してよけるところがすごかった。

「あ、これ」

私が疑問に思っていることに気づいたのか、彼は自分の頭を指さした。私はそこをのぞき込む。

「カメラが付いていて、パソコンの方で確認できるんだ」

「そんなことまでしてパソコンをやりたいの?!」

彼のことは未だによくわからない……。

そしていつも通りの日常が終わろうとしていた。

私は久々に彼と帰ることになった。彼は何故か化学部を休んだらしい。

そしていつもの分かれ道まで来た　　が。

「あれ? 今日はこちらから帰るの?」

私と同じ方に付いてきていた。

「いや、こつちが帰り道だが」

「え? 嘘」

彼の家は別の方角なはずだ。

「あ、朝に言わなかったっけ? 今日から、山倉んちを借りて暮らすことになったから」

「……え?」

一体何を……?

「俺んところ、実はもう次の転居者が住んでるんだ。わっけわかんないが、父親がそうしたらしい。……朝、それを言うためにわざわざ行っただのに」

「……マジで?」

「ああ。そんで、今朝、山倉んところの両親に電話したらどうぞよろしく　って」

……なるほど、全くわからん。

「ま、よろしく」

「あ、こちらこそ」

よくわかんないけど、そういうことになったのか……。  
……これって、同棲？  
やばくない？！  
好きな彼と同じ屋根の下なんて……！！ うわあああ！ 恥ずかしくなってきた！  
私はふと彼の方を見ると彼はパソコンのモニタを見ながら面白そうにニヤニヤしていた。

「ちよ、ちよつと待って！」

私は彼を玄関の前で待たせて先に家の中に入ると深く深呼吸をした。大丈夫だ、問題ない。ただ、一緒に住むだけだ。そう

「うわあああああつっ！！！！！」

スンマセン！ スンマセン！ 今までにそんな妄想は何回もしましたけど、実際そうなる緊張してもう何もできないんですよ！だから許してください！！！！

そうだ、落ち着こう。冷静になれ。

……よし！

「水沢くん、入っていいよ」

「ああ」

がちゃとドアが開く。

「お帰りなさい。ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それと

も……わ・た・し……？」

「すまん、間違えた」

がちゃ

……なにやってんだろ、私。

そんな感じで私、山倉月美は彼、水沢浩太と同棲をすることになった。

## 第二話「同棲」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

なんか、すごい急展開ですよね。

まあ、いいじゃないですか。

さて、どんどん書いていきますよー

それではっ!!

### 第三話「デート」

彼、水沢くんと同棲を始めることになった私。

どきどきしながらも、なんとかやっついていった。

今日は初めての日曜日だった。

「おはよう、月美」

「うん、おはよ、浩太」

一体彼に何があったのかわからないけど、お互いを名前で呼び合うようになっていた。

最初はぎこちなかったけど、だんだんと慣れていった。……この生活にも。

「いただきます」

ご飯は私を作っている。彼には二度と作らせない。彼は全ての栄養分とかを吟味したうえで足りないものを化学薬品で補わせようとしていたのだから。こういうのは現実では絶対に亡いと思っていたが、本当にやる人がいたとは……。

私はそこそこの料理ができる方なので文句を言うことなく食べていた。……まあ、文句を言ったら張り倒すつもりだけど。

「ごちそうさま」

彼は食事の時はパソコンをやらない。

ちなみに、彼に与えられた部屋は父親が使っていた部屋でいろんなパソコン機器が残っていた。初日には珍しくはしゃぎ回っていたものだ。

「今日はどうする？ どっか行く？」

私は天気がいいので外に行って遊びたかった。好きな人とデートしてみたい。

「……そうだな。天気もいいし、パソコンばかりじゃ飽きてくる

もんな」

やっぱり飽きるんだ。

「じゃあ、どこに行く？」

「……スギ薬局」

「嫌だ」

「……じゃあ、どこがいいんだよ」

っていうか、それしか選択肢が無いの……？

「うーん……ジャスコ、行こう」

「ああ、いいよ」

彼は私と住み始めてから少し優しくなったような気がする。クラスでは同棲していることがバレないようにしている。バレたら即退学だろう。

ジャスコまでは電車で行った。彼はきちんと私服を着ていた。私がか用意したのだ。さすがに町中では自重してほしい。

入ってすぐに薬局があった。私はすぐに別の入り口から行けばよかったと後悔していた。

「すみません、塩化カリウムとアセチルサリチル酸ください」

「ちよつと！」

私は彼を引きずり出した。

「いやーだー！」

「駄々をこねるな！」

いい年した高校生がこんなことをやっているのと周りの目が痛い……。

私は彼をなだめた後、文房具売り場へ行った。服も買ったかったのだが、男性は退屈してしまうのでやめることにした。

「お、これいいじゃん」

浩太はファイル売り場にいた。資料をファイリングするのに必要

なんだろう。

「買うの？」

「ああ、そうする」

私もペンを三本買うことにした。彼と一緒にレジを通した。

「あー、腹減ったな……」

「そうだね、どうする？ 浩太が行きたいところある？」

「俺は、スガキヤがいいな」

ラーメンが好きなんだ。

私は彼と一緒にフードコートへ向かった。お昼という時間もあった。かなり混んでいたが、なんとか食べることができた。私は普通のラーメンで彼は台湾ラーメンだった。

「……こういうのって、俺が出した方がいいのか？」

「いや、いいよ。気にしないで」

「ごめんな。迷惑ばかりかけて」

「いって」

私と浩太はジャスコを後にした。

がたん、ゴトン。電車が正確なリズムで音を刻んでいた。それを聞いているうちにだんだん眠くなっていく。私は眠ってしまった。

「……おい」

「……んん？」

私は薄めをあける。浩太が目の前にいた。私はいつの間にか彼の肩に寄りかかってしまったようだ。

「ごめん、もう降りるの？」

「ああ、行くぞ」

私は荷物を持って立ち上がった。

彼の顔が赤く感じたのは沈みかけた夕日のせいだろうか。

そんなことを思いながらも、私は幸せを感じていた。

いつまでも、続けばいいのに。

家に帰ってからはいつも通りだ。私が夕飯の準備をしている間に浩太がお風呂を沸かす。

「ご飯できたよ」

「ああ、今行く」

階段を下りる音が聞こえる。そしてすぐにリビングに顔を出した。

「おお、ハンバーグか」

「いいでしょ」

「ああ、久しぶりだ」

っていうか、彼は今まで何を食べていたのだろう。

「今までうちでは化学薬品で生成したものしか食べていなかったからな……。学食以外でこうやって食べれるとうれしいよ」

「マジかよ……。私は深いため息をついた。よく生きていられたね。いただきます」

結構なできだった。私は食器を洗っている間に彼に風呂に入っておくようにと言った。

ガタガタと、浴槽の蓋が閉まる音がしたので私も行くことにした。着替えを持ってそっちへ行く。

そして、彼が出てきた。

「いいよ」

「うん」

私はお風呂上がりで髪が濡れている彼に一瞬見とれてしまったが彼がさっさと二階に上がってしまったので入ることにした。

「……………ふう」

今日はいろいろあったけど、楽しかったなあ。

……………ボタン

「……………え？」

今、風呂場のドアが開いたよね？　嘘、まさか浩太が……？　一  
緒に入るなんて……！？

まさか、貞操の危機　　？！  
ガチャ。扉が開いた。

「こんばんは、月美。元気？」  
どつと疲れが出た。なんだ、姉か。

「お姉ちゃんこそ……。びっくりしたじゃん」

「……それよりも……男の子がいるのね。あんた、やりたい放題ね」  
「や、ちがつ！　そんな、違うって！」

「うっしっしー。いいよ、お風呂あがってから話をしましょ」

私はゆっくり浸かっている暇もなく急いで出てリビングへと向か  
った。

浩太も先に来て姉と話しているようだった。

「で、どこまでやっちゃったの？」

「いや……俺は何も」

「うそーん」

……何話してんだよ、お姉ちゃん。

「何もされてないよ、私」

「あら、早いよね」

「そんな、ゆっくり浸かってられる状況じゃないよ」

「そっか。で、本当に一緒に住んでるのね」

「そっだよ」

私はソファーに腰をかけた。姉は以前と全く変わらないようだっ  
た。セミロングの黒くつややかな髪がうらやましかった。

「水沢くん、それで月美のことどう思ってるの！？」

「え、ちよっと！」

「俺は……好きですよ、月美さんは優しいですし」

え……？

「いやーん！　もう、両思いなんてー！　お姉さんお邪魔よね……！」  
姉はそういうと鞆を持って

「じゃ、またね」

と言って出て行ってしまった。

どたばたした人だ……。

私は彼の目線を感じた。私は顔を上げた。目があった。

彼はゆっくりとうなずいた。

私もうなずき返した。

### 第三話「デート」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

こんなペースで書いていきますが、テスト前だけあって、親がきつ  
い……。

書いている私もドキドキです。  
いろんな意味で。

それではっ！！

## 第四話「前日」

今日は日曜日だ。

あれからもう一週間が経ったのか……。あつという間だった。

明日はバレンタインだ。

私は彼に外に出るよう進めてきた。彼は論文を出しに行くとかいう用事があったみたいで県内の大学へと向かった。

「さて……」

私はあらかじめ準備してあったものを用意した。

チョココレートを作るなんて初めてだが、大丈夫だろうか。これが、最初で最後のバレンタイン。

「ま、大丈夫よ」

「……そうだよね」

「……ん？」

「うわっ！？ お姉ちゃん?!」

「せーぎのお助けヒーロー参上！」

……いつの間に入ってきたんだろう。姉は胸を張って腰に両手を当ててニヤニヤしている。

「もちろん、彼よね？」

「……そうだけど、なんでお姉ちゃんが？」

「いいじゃないの。手伝ってあげるんだから。……それに私の彼の分も一緒に作れるし」

「そっちが目的か……」。

そうして私と姉は一緒に台所に並んでチョココレートを作ることにした。

「で、お姉ちゃんどこまでできるの？」

「うーん。チョコを溶かして型に入れるのが簡単だったね。ってか、

それしかできない」

「……そうだね。うん、そうしよう」

私はチョコレートを包丁で細かく刻んで溶かし、型に入れて冷やした。

姉が結構手伝ってくれたので予定よりも早くできたと思う。

「ねえ、月美」

「なに？」

私たちはチョコが固まるまでリビングのソファで待っていた。

「どうして彼を好きになったの？ 彼、すごい個性的だよな？」

「そりゃ……昔、助けてもらったから……かな」

「そっかー、やっぱりそういうものよね。私の彼も昔私を助けてくれたわ」

「へーえ。どんなときに？」

「私が大学生の時に校内で殺人事件があったのを覚えてる？」

覚えている。忘れもしない。テレビをつけたら姉の通う大学で事件があったんだから。家族皆、釘付けだった。

「そのときに狙われたのよ、私。そしてギリギリのところまで彼が助けてくれたわ。消化器で犯人の顔に噴射したのよ。その隙に私は逃げられたわ」

そんな事実があったとは意外だった。私も、同じようなものだ。

「ま、そんなこんなで今度結婚するんだけどね」

「……へ？」

「いや、結婚するの。今度の六月」

「うわあ！ おめでとう！」

「えへへー。あ、もうそろそろ固まるころだわ」

私たちは冷蔵庫からそれぞれのチョコを取り出す。私のはハート型のチョコレートだ。それを紙でラッピングして『浩太へ』と書く。

「じゃ、私はもう帰るね。あとはうまくやるのよ」

「うん！ お姉ちゃんもお幸せにー」

「あはは、ありがとう。じゃ  
「うん、バイバイ」

……とうとう、渡すんだ。

彼に、私の気持ちを届けるために……。

#### 第四話「前日」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

どうも、とうとう前日になってしまいました。

明日はどうしますかね？

年に一度の大切な行事……。

楽しみです。

それではっ!!!

## 第五話「バレンタイン」

私は朝早く起きた。

なんだか目が覚めてしまったのだ。

冷蔵庫の中にあるチョコレートを取りだして鞆の中に入れる。

「……大丈夫。いける」

私は自分に言い聞かせるようにして朝食の準備に取りかかった。

今朝はご飯に味噌汁だ。だいぶ家事にも慣れてきて、できるレパートリーが増えていった。

「おはよう」

「あ、おはよう」

彼が白衣に着替えて出てきた。完全に寝ぼけているのか何故か食器棚に頭を打ち続けていた。

「ごめんよー月美ーうわーもう薬局なんか行かないからー」

独り言なのか、夢の中なのか……。普段の彼からは考えにくい行動だった。

「ご飯できたよ」

「……おっ」

やっと目を覚ましたのか彼は席に着いた。

そして食べ終わって食器を片付ける。

準備が終わってから二人で家を出た。

「うわっ、寒い」

「そうだねー」

最近雪が降ったり暖かかったり。よくわからん。今日は雪が降っていた。

私はドアに鍵を閉めて家を出た。

私はそわそわしていた。今日、渡さなければならぬ。そう思うと緊張してしまう。

「おい、大丈夫か？」

「ひゃ!?! う、うん……」

「そうか」

彼はいつもの通り白衣に眼鏡でどっかの学者みただった。いつも通りだ。……男として今日はそわそわする日じゃないのかな。

「今日は……うわっ」

彼は石につまずいて転びそうになった。……動揺しているな。

そして、いつも通りの日々がそこにあった。

退屈な授業は変わらない。

だけど、女子たちの話に変化はあった。

「えー? うそー、マジで? もう渡したのー?」

「うんうん、彼、喜んでた」

女子たちの話はバレンタイン一色だった。もちろん、私にも話が振られる。

「月美ー。彼に渡すの?」

「うん、そうだよ」

「え? マジで?!」

「あはは……」

「うわー、いいなあ。渡す相手がいてさー」

彼の方をふと見る。彼は熱心にパソコンのキーボードをたたいていた。いつもよりバックスペースキーを押す回数が多いような気がしたけど。

そして下校時間になる。

彼が席を立った。心臓が高くなる。いいか、行くぞ

「あ、の、さ……」

「ん？ どうしたんだ？」

「やばい！ 緊張してうまく言葉が出てこない！」

「きよ、今日この後部活行くの？」

「いや、今日は部長がミヨウバン食べて腹壊したから中止だ」

「一体どんな部長だ。」

「じゃあ、この後公園行かない？」

「あー、うん」

彼は少し顔を赤らめてそういった。もう気づいているのだろう。

私の意図に。

公園には誰もいなかった。

普段だったら沢山いるはずだが　まあ、いいか。

私と彼はベンチに座った。

「それでね、今日浩太に渡したいものがあつたんだ」

「過去形？」

「いやいやいや！ あ、あるんだ」

緊張しているんだから！　突っ込まないで！

私は鞆から紙で包装されたチョコを取りだした。そして、それを

彼に向けて差し出す。

心臓が高鳴る。破裂しそうなくらい。

「私……　ずっと、中学の時から浩太のことが好きなんだよ。だけど、

ずっといえなかった。言おうとしたけど……」

「ありがと、月美」

彼はすつとチョコレートを受け取るとそのまま私を包み込むように抱きしめた。

「俺も、いつからかわからないけど、お前のことを意識していた。好きだ。ずっとずっと」

「うん……」

私はいつの間にか泣いていた。目の奥から熱いものが止まらなかつた。

彼のぬくもりを感じながら私は心から幸せだった。

これが、ずっと続けばいいのに。

## 第六話「真実」

この日が来るってくらい、わかってたんだ。

あれから一ヶ月半。私たち二人は幸せな日々を送っていた。ホワイトデーには彼にデートに連れて行って貰った。

だけど、時間は刻々と迫ってくる。

あのときの父の言葉がよみがえった。

「もし、転校したくないっていうなら、三月までここに残ってもいいぞ」

そう、もう三月も終わりだ。今日は終業式だった。

いつものように二人で帰ると無いはずの車が二台、止まっていた。私と浩太は顔を見合わせた。

「今日が、最後までいい……」

「……そうみたいだな」

玄関を開ける。鍵はかかっていたいなかった。

「ただいま」

「あら、おかえり」

久しぶりだった。こうやって迎えてくれる母の姿は。懐かしい気分だった。

「あら、初めまして。水沢浩太くん。この子の母です。二ヶ月近く、いろいろありがとね」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「……ていうか、本当に白衣なのね」

「はい、白衣です」

私たちはそのままリビングにつれて行かれた。

リビングに入ると父親が前と全く同じように寝転がってテレビを見ていた。私は少しあきれたが、私たちの姿を見てすぐにテレビを消してソファに座った。

「久しぶりだな、元気にしてたか？」

「まあね。いろいろあつたけど」

私は意味を込めて浩太に視線を送った。

「……まさかな」

「……その、まさかだよ」

「……父さん悲しいよ」

そんなくらいにしときなさいとお母さんに言われ、父親は元の真剣な顔に戻した。二ヶ月の間にだいぶ髪がうすくなったかな。

「それで、月美とえーと、水沢くんは交際をしてるのか」

「はい、月見さんとお付き合ひさせていただいています」

「そうか……」

はぁ。と深いため息をついた父親はお母さんに何か合図を送った。お母さんは軽くうなずいた。

「二人には悪いが、そろそろ引越さなければいけない。この家の家賃もあるからな。それに、元々三月までとの約束だったんだ」

「お父さん……だめなの？」

「ああ。すまない」

私は彼の顔を見た。彼はいつになく寂しそうな顔だった。

「少し、時間をちょうだい」

「ああ」

私は浩太を連れて家を出た。

そして、近所の公園に行く。

私はだいぶ暖かくなってつばみがふくらみかけた桜の木下にあるベンチに腰をかけた。

「だいぶ暖かくなったな」

彼から話を切り出してきた。

「そうだね」

「……」

私は彼の肩に頭を乗せた。彼の手が私の頭を優しく撫でた。

「ごめんね。本当に」

「ああ」

「私、もつと浩太といたかった。だけど、もうどうしようもない！  
ずっとずっと好きだった人と離れたくなんてない！……どうし  
ても」

「俺も同じだ。月美のことを愛している」

「浩太……」

私はもう何も言えなかった。

「やつほーヨーグルト！ お二人さーん！」

「お姉ちゃん?!」

急に茂みから人影が飛び出してきた。私はぱつと彼の肩から離れ  
た。

「いいかんがえがあるよ」

「……何？」

お姉ちゃんはうつむいて「駆け落ち」と、つぶやいた。

「……だって、私お金ないし」

「お金なら、彼があるはず」

私は浩太の方を見る。

「……」

「あなたの父親が残していった大金がね」

「嘘……?」

私は驚いた。彼に父親がいることは知っていたが、何故父親が大  
金を残してどこかへ行くのだろう。私は彼の目をじっと見つめた。

「ああ、そうだ。金ならある。父親は俺を捨てて逃げた。女を作っ  
てな。三年前に死んだ母親は事故死となっているが、明らかにあれ  
は父親がやった。浮気がばれてカツとなったんだろう。崖から転落  
したことになっている。そしてつい二ヶ月前ほどに金だけ残して出  
て行った。俺は嫌気がさしてあの家をすぐに売り払ったんだ」

「浩太……?」

「俺は奴に復讐したかったさ！ だけどそんなことしたら、人生棒

に振っちまう。俺は化学者になりたかったんだ」

「もういいよ、浩太」

私は彼をそつと抱きしめた。彼はぎゅつと私を抱きしめて泣いた。

「一緒に行こう。月美」

「うん、いいよ」

「ひゃー、熱いねえ！ お二人さん」

……… 所謂いえば、姉はどこからそんな情報を手に入れたんだろう。明らかに最初から何か知っていた。そんな感じがする。

「それじゃ、私はここらで」

「待って！ お姉ちゃん」

私は去っていかうとする姉を呼び止めた。

姉は振り返らなかった。

「何か……隠してる？」

姉はそのまま話し始める。

「………ごめんね。浩太くん。全部私が悪いのよ」

「何がだ？」

浩太が私から身体を離して姉の方に向かって言う。姉は夕焼けに照らされて今にも消えそうな感じだった。

「あなたの父親を奪ったのは私」

「………」

その言葉はとても冗談とは思えなかった。

「そんな……！ そんな！ 嘘でしょ！？ お姉ちゃん！」

「……… 本当なのよ。ほら、前にしたでしょ？ 大学での事件の話。

あのと看助けてくれたのがその大学の教授だったの」

「まさか………」

「ふ、それが俺の父親、水沢純一ってことか」

水沢に名字がかわるっていつか言っていたような……。

「もういいさ。もう何もかもおわっちまったんだ。俺は姉さんを恨む気はない。あんたも悪いけど、俺の父親も父親だからな」

「………ごめんなさい。私は月美と純一の息子がそういう関係だって

わかってから罪滅ぼしのつもりで応援しようとしてきた。だけど、あまり協力できなかったね。あはは……」

姉は力なく笑う。

「お幸せにね、二人とも」

そして姉は公園から姿を消した。

私たちはいったん家に帰ることにした。

重い空気を背負って。

私たちはこれから明るい未来へ歩き出せるのか……不安だった。

## 第七話「結論」

「ただいま」

「お帰りなさい。……話があるわ」

「……」

私はとても浩太の方を向けなかった。彼の父親と母親を奪っていったのは私の姉なんだから。

私たちはリビングに入ってソファーに腰をかけた。

「……お父さん、知ってたの？」

「……」

お父さんは何も答えなかった。

「ねえ！ 知ってたんでしょ！？ だから浩太との同居の許可を出したんでしょ？ ねえ！ 答えてよツツ！！！」

ダンツと私は思いきりテーブルを叩いた。それでも父親は動じなかった。

「ああ、そうだ。知っていた。友恵から相談を受けてな。それで手を回した。水沢くんにごつちの連絡先を回したり、同居の許可を出したりな。俺がやったのはそのくらいだ。友恵がやったことは知らないが二人の関係を深めようといういろいろやっていたぞ」

……バレンタインにチョコを作るのを手伝ってくれたり、あとは……

「公園に人がいなかった」

「えっ」

「そうだ、それがある。」

「俺、あの後気になって子供たちに聞いて回ったんだ。すると優しいお姉さんが飴を買ってくれとかで公園から出て行ったそうだ」

「それって、誘拐に近いような……。」

「……そうか、いろんなことがあったんだな。父さんは知らない」  
「それで、お姉ちゃんはどこなの?!」  
「もう今日の飛行機でアメリカへ行くらしい。まったく、勝手なものだ」

父は顔をゆがめた。

「……っ!」

そのとたん浩太が部屋を飛び出した。

「浩太っ!」

私は追いかけてよとした。

「待て」

父が私を止めた。

「しばらく一人にさせてやれ。さて、母さん。腹が減った」

「はいはい」

私はソファから立ち上がった。彼の鞆と私の鞆が仲良くくっついて部屋の隅に置いてあった。

しばらくすると浩太が帰ってきた。

お母さんは休むといいと言って部屋へ連れて行った。

私は夕飯を食べている最中ずっと考えていた。

食事が終わってすぐに彼の部屋に行きノックする。返事がないのを肯定と受け取って中に入った。

彼は白衣のままベッドに倒れ込んでいた。

「月美……このまま一緒に暮らさないか?」

「……うん」

翌朝、私と彼は両親の元へ行った。

「……それがあなたたちの出した結論ならいいわ」

お母さんはすぐに許可を出した。

「……」

父は頑固だった。気持ちもわからんでもない。

「ほら、あなた。若い子には旅をさせる、ですよ？ どうせすぐにあえますよ」

「……好きにしる」

父もなんとか許可を出してくれた。

「ただ、条件付きだ。このうちはお前らのものだからちゃんと管理をしる。家賃もお前らで払うんだぞ」

「はい、わかったよ」

「わかりました」

そうして私と彼はこれからも同棲することになった。

「それじゃ、私たちは東京へ戻るね」

「うん、元気だね」

「ちゃんとやってけよ。電話も今まで通り寄越しなよ」

「はい、わかりました」

私たちは両親を見送った。

そして顔を見合わせる。

「ふふっ」

「ははっ」

私たちはこれからも幸せがずっと続くだろう。

ずっと、ずっと

最初に決心した時は、もう彼に二度とバレンタインデーに贈り物を渡せないと思っていた。

しかし、渡せる今でもあれから私は彼にバレンタインデーに贈り物をしていない。

それは、もう必要ないことだった。

だって、気持ち、届いてる。

## 第七話「結論」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

なんとか書き終えることができましたー！  
いかがでしたでしょうか？

なんか途中から話が急展開でしたが、時間の都合上仕方がなかったです。すみません。

みなさんの感想をお待ちしています。  
それでは、また。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8337q/>

---

最初で最後のバレンタイン

2011年2月16日21時25分発行